

「最後の対面」かなわぬ別れ コロナ遺族に必要なケアとは

2022年10月13日 毎日新聞

新型コロナウイルスで死亡した遺体と「最後の対面」ができなかった過剰な「感染対策」を取り上げた8月の記事に、多くの反響が寄せられた。中でも、8月に新型コロナで父親（享年91）を亡くした女性（56）は、満足のいくみとりや見送りができず、今も後悔の念にさいなまれている。感染症で大切な人を亡くした遺族の心のケアのあり方が改めて問われている。

「記事を見つけた時は正直なところうれしかったです。似た思いを抱えた方がいるということに気付けたからです」。8月の記事を読んだ埼玉県内の女性が寄せてくれたメールの一部だ。



新型コロナウイルスで亡くなった父親の遺骨を抱える女性＝埼玉県内で2022年9月15日、猪飼健史撮影

新型コロナウイルスで亡くなった父親の遺骨を抱える女性＝埼玉県内で2022年9月15日、猪飼健史撮影

女性の父親が新型コロナに感染したのは「第7波」が襲った8月上旬。月2回利用する高齢者施設へのショートステイ（短期入所）から戻った直後に判明した。腎臓が悪く重症化リスクが高かったため、女性は即日入院を希望した。しかし、感染者の増加で入院先が見つからず、自宅で様子を見ることにした。

その後、血中の酸素濃度を測るパルスオキシメーターの数値がみるみる低下し、苦

しむ父親の姿を見ると救急車を呼ばずにいられなかった。近くの病院に搬送されたものの治療のかいなく、翌日息を引き取った。病室や霊安室での対面は認められなかった。「私が救急車を呼ばなければ、自宅で家族が集まってみとれたかもしれなかった」。家族や父親への申し訳なさから、女性の中で自分を責める思いが膨らんだ。

その後も過剰な「感染対策」は続いた。第7波で死者が増える中、火葬場はコロナ患者の遺体受け入れを制限し、火葬まで1週間を要した。火葬前日になってようやく、葬儀会社の霊安室で父親と対面が許されたが、「最少人数」を求める葬儀会社から認められたのは女性やきょうだいら10人のみだった。

対面時も「宇宙服のような」防護服に着替えることを求められ、高性能マスクにフェースシールド、手袋は二重に着けた。遺体を包む透明の納体袋は二重で、ぼんやりと見える父親の顔に感謝の思いを告げた。対面後、全身に消毒剤をかけられ「トイレで口をゆすいでください」と言われ従った。「対応に疑問や怒りを感じたが『これくらいは我慢しよう』とのみ込んだ。父を供養することだけを考えたが『遺族はどこまでつらい思いをしなければいけないの?』と悲しみがこみ上げた」と振り返る。

葬儀業者らの対応を示した国のガイドラインは、新型コロナがまだ未知のウイルスとして恐れられていた2020年7月の公表から一度も更新されておらず、最後の対面ができないまま遺体を火葬されるケースが起きている。女性は「わが家は今現在できることはやれ

たのだと思う」としながらも、過剰な感染対策を体験し「どうか遺族が理不尽な思いをしないで済む仕組みができてほしい」と願っている。

突然の別れ、最後の時間のあり方

コロナ下での別れはどうあるべきか。遺族支援に詳しい関西学院大人間福祉学部の坂口幸弘教授（臨床死生学）は「突然の別れとなることに加え、感染対策でさまざまな制限がある中、別れの言葉が言えなかったり、立ち会えなかったりしたことが遺族の心残りや罪悪感になることがある」とし、最後の対面は遺族ケアの観点からも避けるべきではないと指摘する。

そのうえで、対面ができなかった場合の次善策として、亡くなった部屋（病室）を写真で撮影しておくことが死を受け入れる手助けになると提案。葬儀業者に依頼してひつぎを積んだ車に家の前を通ってもらえば、家から窓越しに最後の別れができることも助言する。

坂口教授は「遺族が故人に対して『できる限りのことはできた』と思える環境を作ることが重要。みとりの医療の現場、葬式、火葬場などそれぞれの局面で可能な限り遺族に寄り添い、しっかりと最後の時間を作っていくことが本来のグリーフケアのあり方だ。そういう意識が持てたら遺族に配慮した葬式や火葬の姿がおのずと見えてくるはずだ」と強調する。【竹林静】